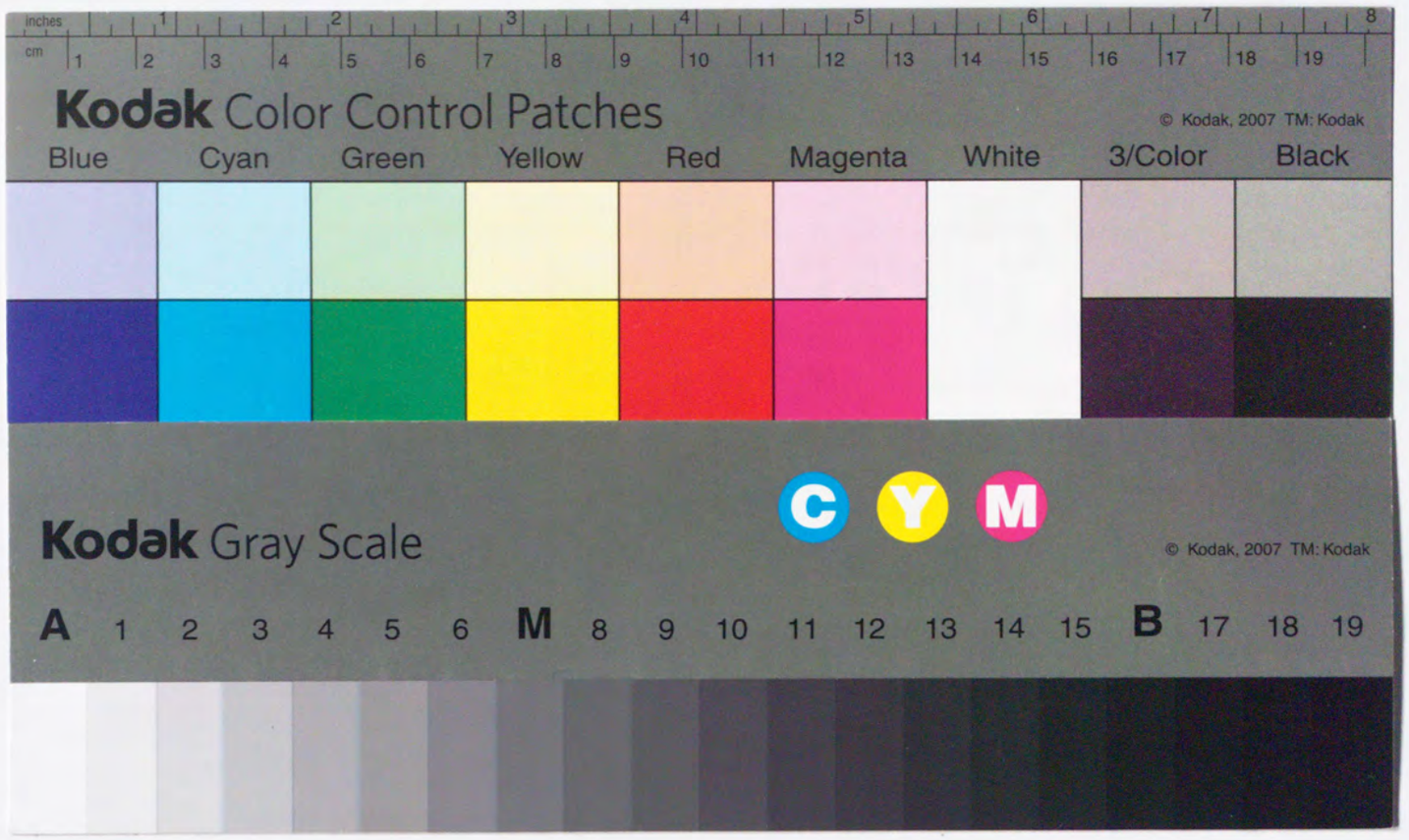

inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Kodak Gray Scale
C
Y
M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

延宝七卯

七月

江州 彦根 夏見

松梅枝序

先達て世に廣く一休禅師作詠物語のよ
(ふみ)(ひろ)(よ)(ものがたり)
(ふみ)をもて)(しめし)(つく)
東坡山谷小指の爪と燈影
(とうば)(さんこく)(ゆび)(つめ)(とうえい)
(ゑん)(まつ)(うめ)(ふみ)
業作なり仰のものも
(ぎょうさく)(おおせ)
相与詩語人を導き
(あいともに)(しご)(ひと)(みちび)
慮を尽くし實を
(りょ)(つ)(じつ)
(ふみ)(しるし)(むろ)(はな)(よう)(富)

ひとしく老泥牯古木鳥は蓄右の大きとく
且禅法の端を有もされば老和尚
古いとへいとくの
と嗤を免りて庵溪を道よ音ずけ打込生
死の海を押わて浮世の波よ抜る
落渡しのうろ心を指さ
云西も枝垣のう
寺る法事書おりもるれ教醫者

丸竹欵冬男女上下あんを綴うの紀よあるこ
とそはるうみ湯りそること詠より時代よ出来の
世のあるとくるのくびさおどもこ三聖三笑の親と
此名紙の方人とするなる事のことを只人
やりよ礼候そるハ笑うる女の六十四帖の帖
よ免をそうそげるもる事よをもくる蚤
ものつと歯の根をそめらもるハよもそそぐ人
松楊

投こ云名をおりひおぬけさや扨んといふひとそ
赤よ行を残てひるあよ
そるそう縄もそうへおりそ
うう一無と得を煙そ
と送るあようん千時
城し銀里末手一みらり
よ舎く号と全一六冊と

竹素不食貪樂

一休竹泳和尚對句

二之巻

不動如かなしらむ

悪女の紅も

不きふ死れ物茶

三之巻

情深き

猿が泥棒の接句

釋氏家と民称とあり
當話よこまるよみ
河豚汁の咒
四ノ巻
嶋田ふて竹森多柄
とりあげ狂言
一休元者と問答

一休僧正絶入
淋病の害性
五ノ巻
竹森伸人口
鼻ぺしゃの療治

六ノ巻

竹斎よまひ云

竹斎愛想

付紙の俳世

大根抜歌の図

同流泳強

松楊枝并

竹斎不食貧楽

の事世の事

竹斎ハ糸田舎まで帰るとてよき

ものを見が利根我慢

の次第心ぜまそだふ強

れどもたゞ耳のたぶ為

の足もとやうやく一生思ひなをりどつ

もそこそこ腰治られハ糸ささやうの保養

迚よさびさわ者の風

貧去ハ不富と思ひ

ものとゆめもおもはでうまれつきたる武藏とも
それぞれのうぬが所のうそぶくを人をあざむく
ひけよ心をはやくさとくきこわざる情
なき男をもたなわち草紙ものづくと口ずさみ
なおそばひよ食わげ者わげしてかうもちんと
ひわびするこそよされいぎ礼とさすがの
采うねうとの中まよ蜘蛛の巣をそこ面ともと
すまじき姫のおなごくさびしく見里の光も
もるもくまらのるる果しをおぼうる又二まよ
指添よいけもし縁人門おより事とうとさればも

蜘のかくるよみもとそ
まふ枝筋もひねうそ
はそこよ積り書
りへもすべ只おごりハ
りいとそこまる
費のべ大蛇のうち
股よりおちくんわび
よ嘆いると波新
うとよりまいどこ
きのむ面そこ頼岡も不幸なり奴ぬりしそ

もてる笹てらひしまきまで
もとりわへむと門かよりとそみる
ようけ鞘おきこまりよいそれてもの
との使ハ来りるよ鞘らそうるの山ハ大打石角よ
ほぶまつ古ひ中をいふふそて指少んだり
大喜わけめ何のよき方指をきるにめ
こ碧染痛静よ嵐人まらもちろびう
せそうまてやまじ
ものふな長ていとるまよ
のまも未清をかり川色よ妻うく家ハ

とぎはやきこゑれい
神やまてるよ
まが
ひしりの
竹鉢
神
神

とうひろくわうそくれいかうさんしゅ
おうそくをまねきてこれをおがましむ
恨まびやもつて神くふかうのものを
敬よくちうなんぞんして憐をれ
こうしてそのうちをはらくなごめ
のとのとき竹林のうちに光つ明をかんじうこれ看病
右きるう無きめんくる所をこうめし
こくとうり按きるところ扇をこうめし
てくおりそのめんくとき人く神よりうきこは
いうるまでもなくそれ人くの事

みこと申ものとおもひへ竹林ぢてひや豚のあ
がりてこをとそりてごとうんとこるを
そはそうとのどもを求て竹林まで
ほとは絶ぬやう豚は性よくるものをといふ
やうにおるまでもいまさらこを言語
そえうまでもなく敬不
渡力又指言のそれは方右まよ豚すこやかり
竹林をめぐりあるいは高代の名醫竹林
のうち民家よ来てはまて病人秋風よ恐まて
こを豚をあえ出るものとうめ此神をうは

年後のことと始つたのでもまだにてとかくひなびてゐるりとくて竹取懐中の小袋より黒薬を出しめしのうまいは鰯の頭も信心すれば鳥候氣とうえよをつくみくおまもりのうまいはさよ薬師竹取さま毛だらけ薬ぬりてもひろめたくなりてもひろめたくなりてもひろめたくな

ことに見めぐるましあはづうの小堂あり立
寄のそはの便宜(たより)ありまれば初の日より奥と喰て
うそうまらさくらの花の盛(さかり)のころと蔵(かく)のうちなる
ねさる紀人の像(ぞう)よりんさをりけゆうとさを
前も妹(いも)ろ兄のごとく跪(ひざまづ)のうへともろこうもう
けよろりて巣(す)のろくまへよ救の大悲(だいひ)願(ぐわん)
とぬくさけうまつはふ見くもよわひそ
ちくひげくへもろ衆像(しゅぞう)はつくをんでみくのふ
世人わくぬ名と身てし若ひ佛をといしくもぐ
なるさ事と設(まう)ける鳥(とり)うそうまうみと悔(くい)

肝(きも)とはふ自(みづか)ら身をこと真神そといくぐ文伴と
音(こえ)が雪(ゆき)るへくというんためよをくいひ
もうまじとうふまくして佛神の表(おもて)
私(わたし)といふ信の日渕(ふち)名わるや鳥(とり)うもやふ
らをやをいくり竹筒(たけづつ)を出(いだ)して名を書(かき)
よもうへで思(おも)うりとの表信の日佛神かと
つ祥(さち)多(おほ)うり佛神矣(をや)うりとろへ海(うみ)
おうりとうり竹筒(たけづつ)をくいとのをしとは
何りのそ眼(まなこ)おの焼(やけ)坂(ざか)をとのの竹筒(たけづつ)接(つぎ)と
ろへ急(いそ)てうく

好悪のうつゝをそてゝみゝも
人のまゝしいふ物をそ
信とそこゝろもせきこゝろ
らつゝまゝ
をつゝゝひとのいふことをきゝくべて
まのまゝせのうへ
叶つゝゝ竹筒をはなの松まてうつくとうる
つゝ胸さうこゝをさゝゝ
そゝぐ紀伊国」やなり都あり
く取ゝ方よゝて法師ゝ

思紙のゝ御ゝり先
てゝい幸ゝ
まゝそや茶ゝ
茶紀の元よりくゝ
作り製業後の角て
そのくゝゝし竹筒と
掃ゝくゝ
わけてゝ
和尚とゝくゝ
らきゝ

江州 長谷寺 蔵見

不動のかしらを申法苑を望小門あり
一体和尚と竹林坊とてんしゅをおさめ
ばくとうてんじゅまうかまこばいさやて
てうちつまうかまこばいさやて
ほどろうそ落のこるふ出のひ東山ゐて裏打也
みてゐは編笠のごとくにひそりまを七尺おまりなう
大山外まりて秋物といひて貝をくくしく吹さ
てうちをつ一体も竹林坊と一騎の抱をおとろさ
まて二三人べてうちとびかへて伝法とてをされ

江州 長谷寺 蔵見

数の敵よ出るひつぐ
いさ枝つくく一体歩行
とのゐひとりをれがさてごを一体和尚まうて
ますよいよくばて竹林をとりつ
かいの数といつ也ひとりけり吸よりん
体とこくと勇ひ給ひくまを宅女人分
などもろび処日ゐ

ことありて和尚之按内へ
入られけり山伏ハ大峯山と
奉年囲安全のため護と
山とを拝めうとぞ吹よせて
くおほくたてられけの中へ
をもくもちくたてまつ綱一筋なげ
ゐのかみ山伏を目かけて幕内へ
ゆ小今一筋と云て又貝
ゐれりける山伏
中へ入られけり山伏

とりの音の如く振舞ふれいであることと
つひてあけゐ日ハ
日とを定ぞんじ申ん
なひしやと云ハそこ
あるとも申ふく一日ふ服おれまなり陀
方のをそれてんよりの
ろの日のゆめ
見ゐさおこす
行衣も用ふく
世中よとなりぬ

てゐるうちに、ふと一むれの雁を
見さだめ、両手をくちびるにあて、
空ひくく山伝ひに、次第に次第に
下手へ〳〵と飛むすがたを、見送りて
ゐるうち、大ぜいの雁、一体作りて八
幡宮へ八詣れまいる体、面白と共に、
のいろ〳〵ふもとを指して、次へ

〳〵のごとく、一疋ゝゝ、ゑんえんをさうして、秩
父がたをさして行くを、見つゝ、
くるをたよりに、尾を振てまいり、一体の
三三九八りの縄ざれ、ひさまをよこたへ
いふやうそれがしこそ、
廣元とそなる、縄をもつて、
相撲をとりあひの、もう一体

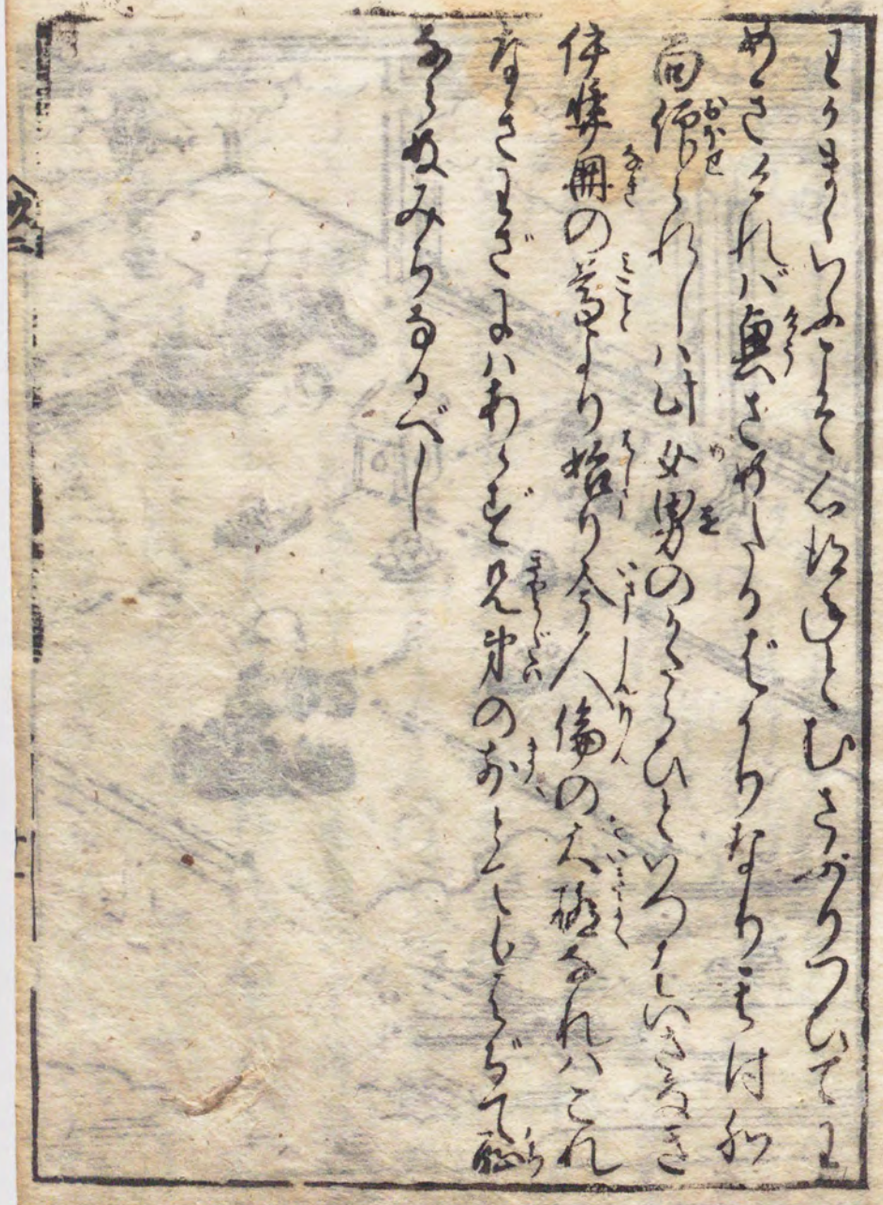
悪女の報ひ

ゑもんさうよう悪つよくなりしまゝ一体
と作兵衛が宅よりて幸ひくろいひとゝもてか
しまゝうくる内赤の兵衛様の御病気の方より
女のおそめさへそれがいふ様ならば内方ゟいと修ら
よし作兵衛ゟやうねてはめうけられくれあさ
はすぶ作兵衛でいやあけて仕舞ひさま也
ふんしあるゟ女のこゝろゆへよそあをし延八仕
てのあさ八ツの年こちら内の御奥方ゟ頼まの妹
ゟそうぐゟまくやう年しよけ縁うをつさゟ

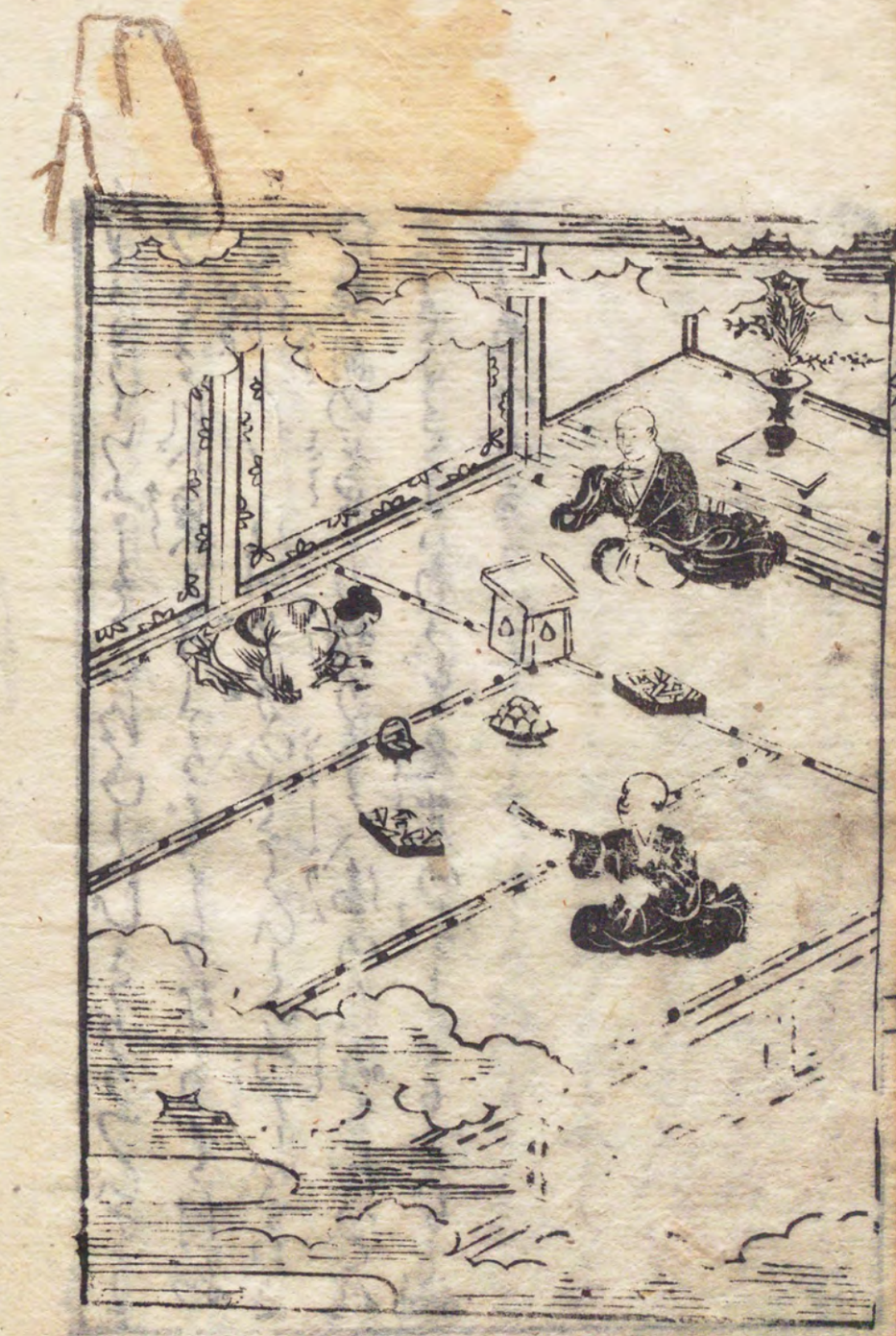
珠江よりはじまり流れ分生付近のうぐみ眼こらひ
鼻筋しつかり耳せく頬先への如うまれてより下よ
くとまうす承るうそ松嶋切門巌嶋参りとてもしよそ
ほひよいやまうそんな芸行者の福神そめしお
もうこい女くよ流のうめ河そこ野ひて鯵の頬
なるやうにくり中老分のひざをもつ也掛作のやく
なる肉うそうら牙志こめうそをそしりくた事をまうく
松ありうそお神あてこそとつきめくたあめして呼嶋
豚多やねこりやそ右衛門よハ何そつらうそうそう
やあれないなるおくへさ油ていないとおりふぶりそうれ

行うそる鹿同つくひよ志なうく笑ひ也
て一体とこやりめうそのくつきハおつ千墨の
ゝこめうよおくしをそくとたみうふ
ゝこと一体奥とさまてありそれをおりまし
きうう名ハ何しやそりそれバ作蔵うを指り
これハやこ方よ右しそ角ハうとしてこととか指
うのんそくいふりうそんなうぐしそうつくこと
名つくこそくいふ面指くとうそんなうぐしそうつ
て作うハさそやとひ作ふ

しさつてゝハゞうあるれバ仰ぎ敬縁のろうそくをつを
給つるハさきねたるゆへそれおかしてゝ逃おされ日比
さめてゝ小神をぬよ眠くの解よもしごとゝれ日ごり
里小僧やのくもよとをを教つきて今ゝくやく
ほゞさびく袋帽子のゆやれまてひとりのいもうとを
をぶりとう目のあのこ途川の婦とかよ〳〵このこの
ををくるもやまゝくさの方それくゝ又をよ生ごさよすもりごゝもごさゝゝ
ものうれゝさよゝうぐゝりの縁ゆ
とゝゝゝくまゝをひとうゝとゝゝをさごぐゝ



ゝうまゝいてくれゝしさぐうついて
めさゝれバ魚さゝしゝゝゝもけ和
尚仰ゝれゝ八山女男のゝゝひくゝいさき
仲蜂開の等り指りゝ今ゝ傷の太祖をれハこれ
なゝさゝよいあゝをゝ兄弟のおゝしゝぐて祖
ゝぬみうるべし



兄よ味ふりて見よと度を重ね今日のごとき客ばく人間の式には礼義の二つかまでて云ふてこれバ主従平おりて一和もおく親子さへあるを増しまふ云ふ二ハ云ふ三ハ来えく ふく義こゝろむりよ此事ハ花形ろくさ肉名ふ ごとくしかよりへバあるさまよの全体自着の治うけてゐる也ことりの名さわけをもまへ いぐかんとくろふいひやあるまへバ竹斎女もを かさのこゝやか余所みるめをありさればいざや

うちうち勧んと座興でそ有ける
御くをも申も再興より隠れ一体しの名号
て山ぶ聖へ帰り給よりうちうちてうくそわ
そなりそ

大さけのなげくうちうち
おしうしくうて竹取の昧和をいとうちう
神う連ぬまくよおもんハ世由
う余所のくいそくまうやしよおもんハ付
もそしてもも和の捨るおやなうべて今そ

うち分のうさ身とつりきていつとハ云ともを
おもうも白ざくとそうまくへ神よ
来れおりうるく神よ海や仲の石人そうう
移兵衛り和床の間よ古の姫女が園の流松さ
とおりもくべてみとうさ死持よおくそ塩風も
男私よやう連ぬくんやしめ鳥の帰よるもひと
ひおもひよ男吹こむろれよ山のおまでしいろハ
そしうこくれと情とそうめ行歌れ行の一字や
ねそうしらそのこうしるよ宇いわうハひか
さ花小舟いつらうべれ波よう人女る人男

彼のえん切くうろうろ
うろうろとみをやとおも
一首いうふそ遠慮を
なさけなさうめや
ら〳〵でせめめう
も悪黒悪い
うつし生してもそうる
助ぐりふ格こい何のようなき
しんまうそこうしてそれバいやうこバて
よう三途川うち生れ
けともるこさ小神ともさ
おようありけるがよとそ
一緒ござよバあるぞ三
うりふふ清生こさ
小神ハおよひそめ
ひよう走しとさ
いうこのかをもう
さまつぐそめ裸
安をよおの而して

伝くありて八ツ半頃の日午の
日成の日山門より往ろうん有のうち定めべし
門んやをうれさまよりまうさまれば
わまりふうまうさまれます
ろうこともも孫娘のそを
世の中よみうけまをりたく
頂けをくなる

狸の爺の思ふやうと今みてこそたそう
それおりへハ姫かたちをくと女乃親
とともあげおよろこれバまそれきう一念が画界と
なりいちくまを殺さんぞと歯をかりして親をあら
わしてをそへかゝれバ其時下
おいその姫のちうのうぬ出て
むすこハ界外見ぬくそいひけり
今一人乃美玉文くそいひけり
君るてまりくそん界
いろとし怒

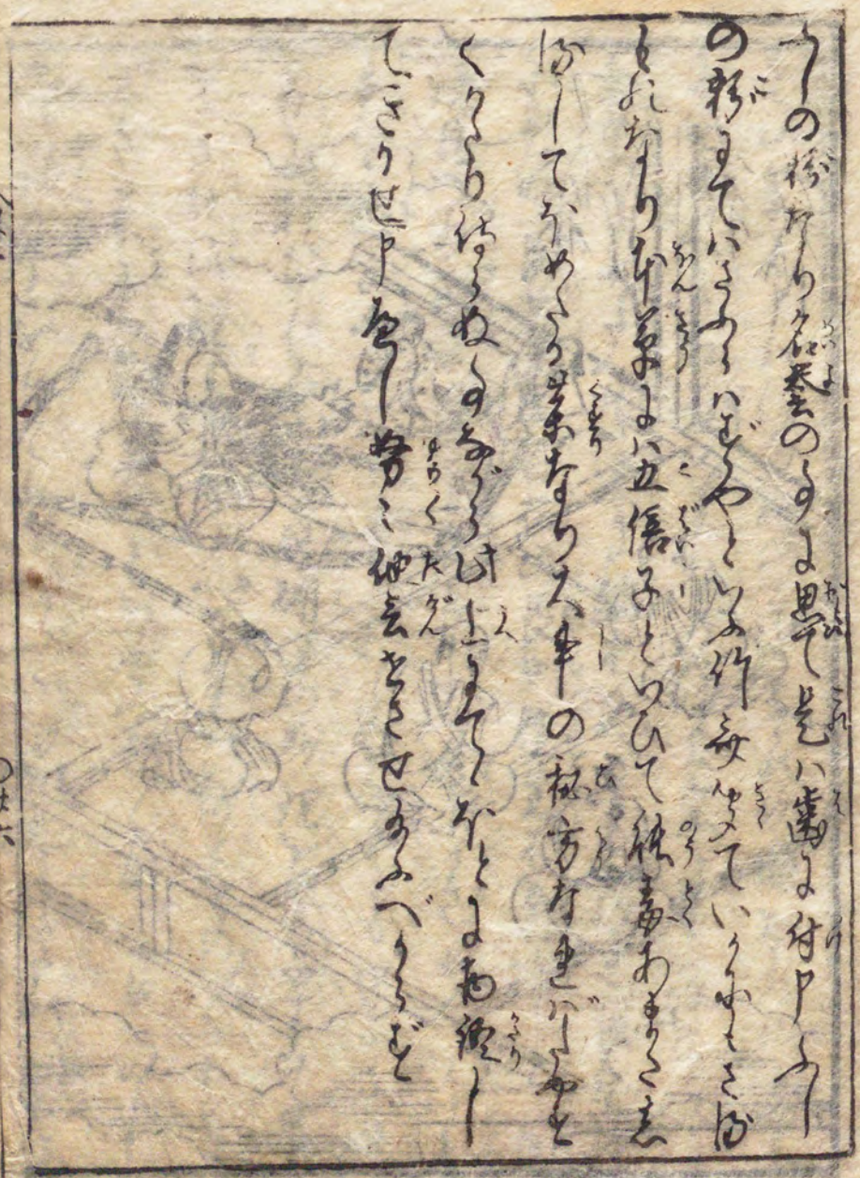
仁老不死の妙薬
おまりてそさ日華宗のありけるつまくと
剣んとておさるさく娘と病界よりその時
かくしく合けるハりそ乃
くまく流利のはよをあるべく死の形その言
用小会仏のひさまでへなバ見比唱込くる法題目
とをもそこくて阿梨樹乃
枝のごくに死てかくべそや地獄をへく
そと会はよいく合てそりれ言一体その家はまへよ
ちやそとくてそ笑のてれろそ

のこよはさもこそめと極て女のこいでこの
ごろよ参仏まうて権うすてざるのいり権もこやうあとか
さうやと彼新ままちのおよ門のやさしくしくして
伴のとうりと幼のく掲おからしを拾てをみよ行て見
そうの通へ酒屋とおりを入てあり亦おかうと
一体つくくとをり春のひてどうりの細そ引ごとくへ伝
放そくと心のまよおひようざうの権ありれい幼んまおそ伸くとび
てもっといひて活ゆり一体ようをるよ数十及おり迄言春ま
会仏を唱へてごうりの兵吹へくとひようわうり
乃しの安幼りの八老を婦くくやひ老やくり活よ活て神ゆ

れやどをくくつ出こと仰事ふるるくそくとへ
どもいくとでひきそうなうふとをれ
逃うけようよやなやうとけうるてをくくり
易めればおつくそうとめ活とひうりけ新
どもたきよおどころをけづくりやをれまうま
うちてきて抜よそくれそんつらあさもの活
ふなやをうむ活仰糸そうへわそれを場
まう会うじちや仏めさよち人のとと
とこうと振りさそうむ女房ろうやうや
さお脇をさせめひそむうさるよ人抜

浄土の一代教の主
なる三部の経
とおぼえて
いろ〳〵と修
さそゆるし
まあらう
た地獄の
一肖
念仏を
弥陀を

ちひさうれいぶつ
ここたのし
もろ〳〵
も扇
ゆるし
もうまぢ
おして
かとう
いうぢ
ここもと
女成男子則得成仏疑ひあらず



うの形なり名医のすゝめ歯よく付ケ
の形そていろ〳〵いぼやうやく治すれども
もよおもり年まよハ立信ふとひて紙毒あまりこと
ばーてかめくち薬なり年の秘方なり生ぢ
くくち結めぬるものくちよく紙ー
てさり世ヤ多ー勢こ細云をせふべくそ

まの腫の強ばる如く痛うなれどさしてねつくこと痛
なくそれ共ハ紙うんとして包ミ歩をさゝのさゝ
まもうあけの小服中ごろつきしんひきそれうこと
くしよ云それで生こそ大騒なまでいよ〳〵名
なくなまもさうー小便のごとくうーてそこら
まち服をうそうそなり当のやうよなりてそ
まれば座中しの揚よ右をまうさんそいあーを
いまぐうそどしなと合根を授ひ居まいさ
らを口中よわるべうそそうく糸紙ーの法紀ル
まうりくらめそやをうふ根ぜまそてそれを

後禁酒乃誓と立給ふとぞ
とぞや

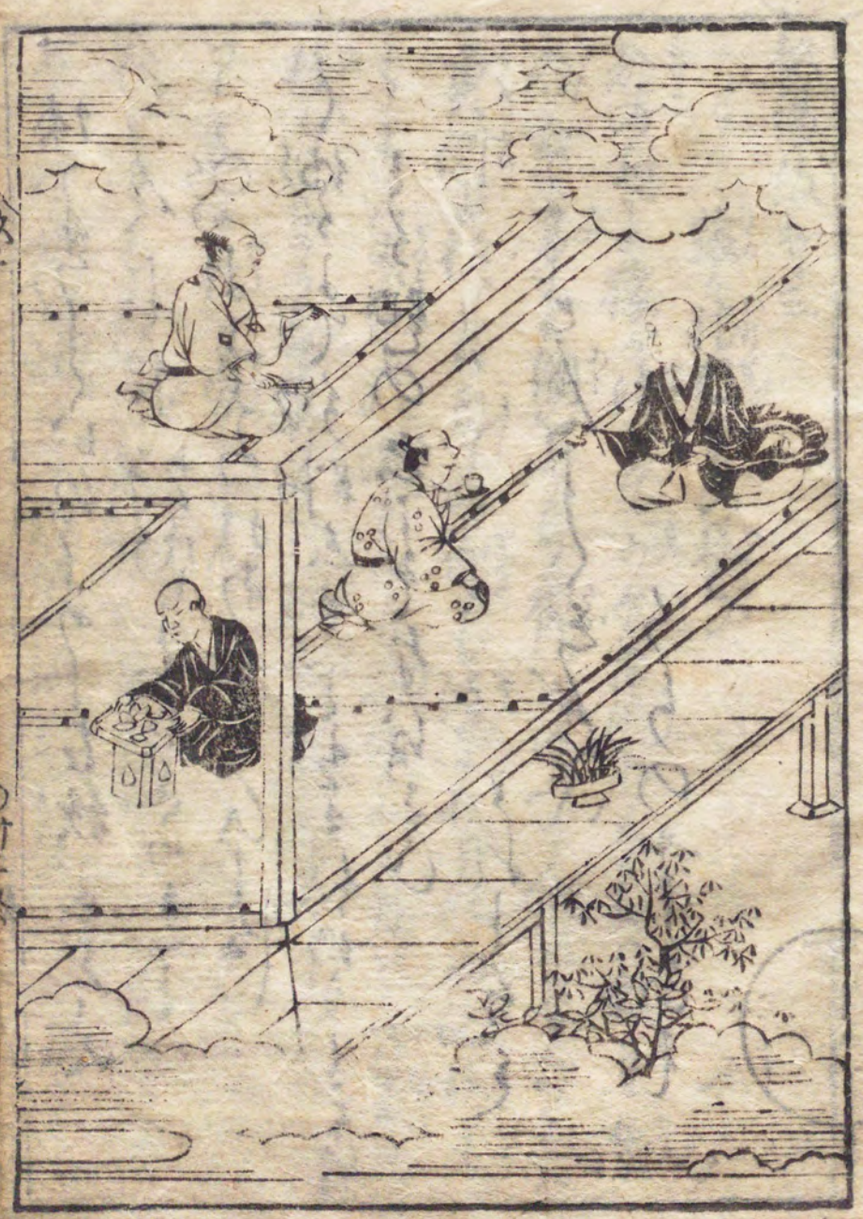
あれくるくるさまく三笈捨の仏さら
我しら川さけよ負かあるとのへ
悟後法も

人さろかさろうはむるるの竹妻ももて一体
り出合例の天楽妙典をいひ出してりひと
法あさ川さんのりけるかぐよ投八会仏を弘弘天
慶るとして日曜て悪にをされぐ〳〵あるよ竺梓
のるとりよおけ給くすうるうてまるなるう

作らるくいる傍くしさやのるあるしのきこと
をそりくりる我のそくいまるくみまるよう
御とるつるれバと文何とままくくろるも
すくをを日まるの舟ぬとろう小僧
よていちさをおくよて世とろう小僧
いうぐるる亀根つくくまるくく角しも
そ九年面架そて九年れあひさ架小向ひ和こ
いぬ肉亀ものそて待るれまれまる
て語ら語そよて山里をそしつーひすよ
逸あの柏樹校とらくくまる

とつるのわる指の足跡よなりやんといんで
一体よしめしそれ方の宗旨しは方の法縁よ
みるんひとりがまゝくへバさらつゝさけくゝて
ひそうなり色よ外変しおそうをくがさ
ゆめて悪名しお事んるべし一二ヶの
業よ勧なきゝとて病の痛まをゝゝを
てお事色しれうれ結句ハ大病うて
ちやうきよ死ゝんん法縁又ゝゝ兵縁
ひへもゝゝそれ方の宗ましてそう
き深へ探究しあるゝゝハ屋探不退の

んよたうしず善悪色ハ皆の金指ハ己分のかり
名法なゝゝ南地色ハ場とも又
し業婆別寂光或別報仏九界別仏界か
ゝゝそれ事じ又ゝうゝいの余縁ゝ去此不生
己分の法能ん法の縁ゝ去此不生
云方便ゝゝバ皆無平等無二無差平等
生悪色吾子例ゝゝ酒てゆゝもしをき
教ハ別法不思久字
しゝんゝ根やお方ゝゝハかゝうゝてゝ



うくいらもみぢをめぐるあらし哉

秋野山数他と笑ひ

よハく寒くなる大方ならていひて

めぐりあひやそれともわかぬまぶ

ましとそ思ふ胸の月哉

猿の化殺生の報ひ

加のあよ猿ヶ沈とそのかが流あり其ハ報ひ
ぬ小て常よ淵とそう猿ヶ沈とそのかが流あり其ハ報ひ
奥渕よりどり岸の柳よ波よあらん泉流清く
そしてハ布ハ流となり砂のよう月と五日ものの
林もさみづ映ろひ是ハ桃花の芸舎の比奈うこよ
又妻よ奥と来て曲あり盃とうつる賀江乃
秋、とうとくありと見一体和尚ハ仏へ納涼ハ
めふ竹秋と後の世結ひさ海ぐれたのうとをなして

ふいだん天の雲をよとびあるき波ようようの浮勒籠
うち一ツ出させおいてついざや竹取山沈の魚とより
てもよりハ琴の爲よ歯してさ実をんと作を
進べあとそれ高ぐぞれ竹取余れみる月もおくさ
まぐぞ作ぐとうげ一体のやしゃみ仏
衣をひけそりおひて魚と追てぐさまうひけり
私ははや千里人魚なりかくりおひてなぐぞと
よむ出ぐをいかれ追ぐをく古間も作ぐ
うち待ぐさてくうよ
作ぐんと

村中のくをよびつどへ
てくまそよ梢よりて栄よろこんで大勢
おのこどもうでいでくくみな
なる人々二人まろなるおとたんへひろけ奥
をそろひて洞窟乃中へぞ入よる里乃人々此
とんでうち殺生禁断の地よまもりつまうを
みうまのをそ弥増の曲事うるをれうめされ
とそとめきこゑうう一体仏無人さまおとろきあう
殺生禁断のおとをもつてをひ向後のうをそくいう
色それとあそをもうりまおれうをまもいれを

それ向ふいて出そ色ゑ城よくれとい狂ふくおまき
くや滝とそ掛よりけう一体亀矢をうへあうを
みうみ作をういこそに悟おうさ向られ仏法のよふ
多念を指うハ出家出世望するまでを一大事乃
指云教よそれうう内よ向ふ無き悪人ふくふ辺
ふ四ふそ無き会なまこい福ぐくハ天神地祇
力を添隆依の祥をあていとうくよ此如来妙躰
報さまうや南無弘誓乃王大悟法門集く大
都ひく色おめさ指天弥陀なとて我お
結ぶ衣を破ぢとなぐ詠神の指天村の老ともも服をこかう

を測伏をうるものこそ科のよし科坐へ一参れく
遠恨深く頭列為してこゝろをつめおもんぱとそ
おろ振ひあがり一体ゝ今ハそくかくと力疲しまかくと
練ることり多く膝の皿とをもちて絶命下生死実よ充ち並べ今一妄
忍癡五智なる者どもをもよりて生てをるまぐ
それども我く死して後悔をへさぐ痛しさ示
あり〳〵現て笑ふらなれ我宗の祖師よ
こそ海苔を喰ひて無明根元の眼を開き彼
のうらべをうぶりてたよ悟元智者となり

おされでうぐまれ魚偏だらうも臭をとり多くと社
を食初めたためよいおしぶ夏百日叶ふ私究風西
のごとくなく悪得仏果叶ふとて二世の
法仏ふうそれもつくわことなく魚偏う抜をひ
のまに魚て奥紙一瓢よとり入てハ臭生死多業
未だ去悪比日発ふと告果ふ又山林の歎初
よいれを畜生餓苦と廻向ふてはさを
まび殺生をうべさまに細かうされバ仏し九界乃
元生ふたををんなのちうひろぎそ六乃輪廻の元者ふをとらひまよ

罪ふかきものおかれ往生をとげ浄土へ
ゆく大綱よかる所ゆへよく速て
うるゆへよ常よくく
往ときくや世往へやきや物菜と称りひしりこと
おもなれ乃ちよまてもやうハやりこと八綱ひく一
筋の糸つるかよもとそくて実
おむろれ大海しも安糸世界の浅きすでし
よ世往生則弥陀の浄名をむしう仏生一世の対
を滅罪除仏とよしらしが未世の童男童女
悪癡無智の衆往生をもつて八唱ふるべし

ふむわくさ仏とそ
をえ往生ありしをこ申
業必死の難とりあ
ばぐくしもしてやまぐさ
子一称の者味されで天
よ咎必学滅光満の明
そとげうるべき称仏
ふくしも智恵甲一のえ
妙法蓮華経を読誦へ
角を脚下のえよ埋南方無垢世界よ生とうを

主八祇於海中唯常宣說妙法蛇龍と向悔し
拾ひ鳴咩ありて恐れを除捨さんとする方よ
て佛のまゝをそうゆへよて法花をいうこと
てかゝる人雖よあらんや百日の死ものも
なくそゞてす善人驚乃ち民衆仏性同妙の
御門をまつり十悪の中め悪にめ科い犯すのこ
なりそ小奥ゝ今下といいとこいてこ能一眞の人ろを
こうを長なうかくこれ仏の飛よ弘法を
救し或ハ仏の方とそ
傾ゆゝ又と救し

一体おうくおほくめ
やうと大きなそのまゝ
ひきうごやう仰ぐ
の狸い物のうごめぞ
とうり悪人よ妨られ
ほとゝぎすよいよ花筵
て云何よはし

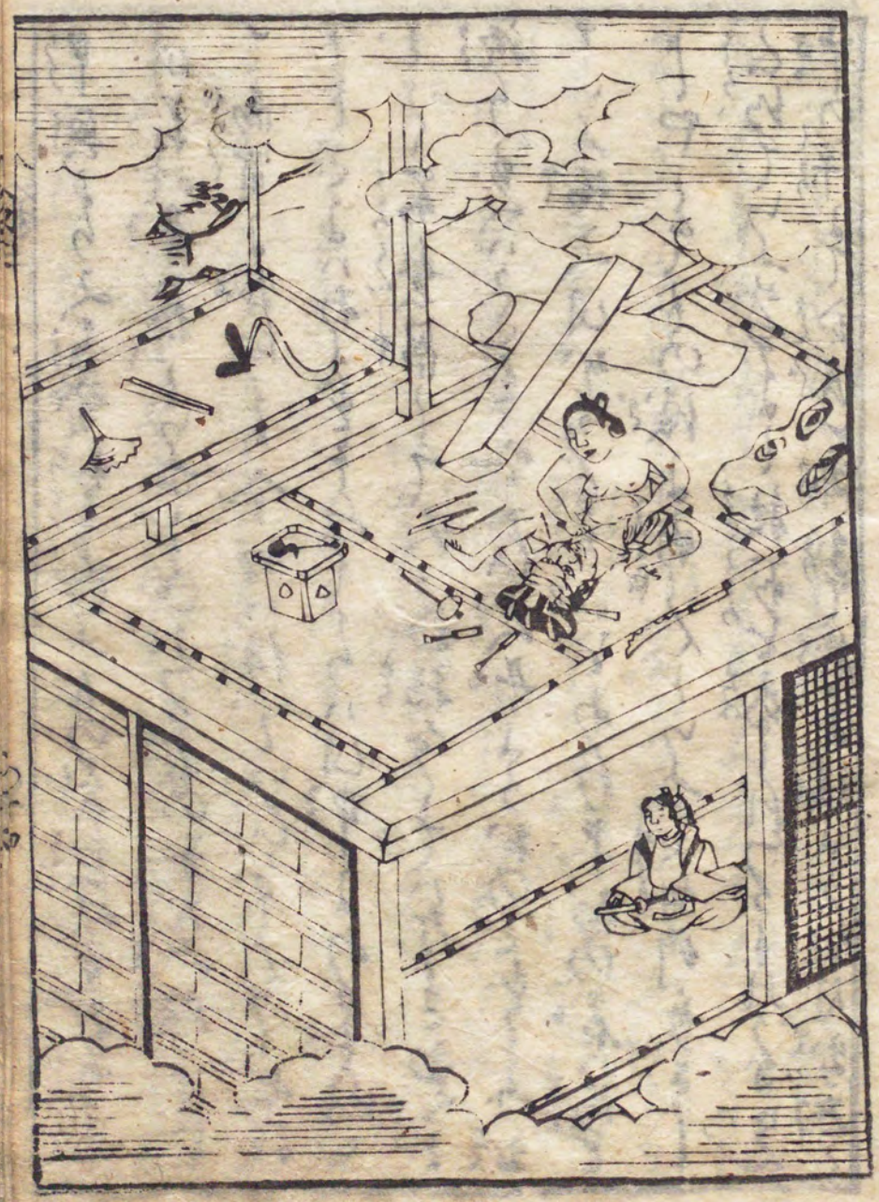
又吾朝の聖徳太子も守屋が悪心をもりてあて
こく逆ひて害ひ奉らんとそゝりたゝ
しを拓天善神やいたゞきうちうちに
もりいよ〳〵仏教盛り品々の寺塔
ゐまでもくれをもひこゝは任とたゝしと思ひ
のみよりとなげ衰弊の御衣をとゝみ漆乃麻吹
みよもうごくしまいてりうを称とゐ
衆のちまくよをもて方令とありなしまを
〳〵め給り若めり功徳もてしてもを
まなるよをかくみまんなる

のうて給ひ候りし我先をべことをいまもり
しては御身の親縁しもしてかう浅まし
れ心根やうて枝みりあをてうの人ハ作り無
そうよれしそれどもいやく富貴の奴余よ
とゝせんと事なりとゝもおもふ小遠ふ
これもい果し命ハ空とゝもおもふ
つゐれ辞ざめよてゝまゝひが川あ
おぼえどれ拓よん去ら実仏塔ハへゆ
てよういそ多分合歌さ
拓く行脚の所事ゝれ浮

らさしめ給ひて九十日の間まで多佗の行儀悪
形躰の行者に千日死骸しかばねを書写せ給ひて一切経の要文と
まで書写せ給ひて一切経の要文と
ひとしき御経の功徳を
ひとしき御経の功徳を
山中より御迎ひの人ありしかども七箇の呪符と蓮の
糸とを八寸ばかりづつ
糸とを八寸ばかりづつ
放ちくれとて御ふみを
放ちくれとて御ふみを
まいらせつ閻王大王乃
まいらせつ閻王大王乃
らず取りて
らず取りて
きれいなる
きれいなる

山のいとさきらず五道らしれ
王さらば彼さて十王を
三悪各吐巻とりて
の厚病悪重をうて
巻は帝釈の表見職まで
をやとうて
ずれんがありて大
ふりあるり又四角
いうそこいは
愛奈番叶祝とよ抑叶妙

まことや清和天皇五十九代文徳天皇の御代でしいへば人王五十九代文徳天皇の御代でしいへば人王五十九代文徳天皇の御代でしいへば人王



[illegible]
[illegible]
[illegible]

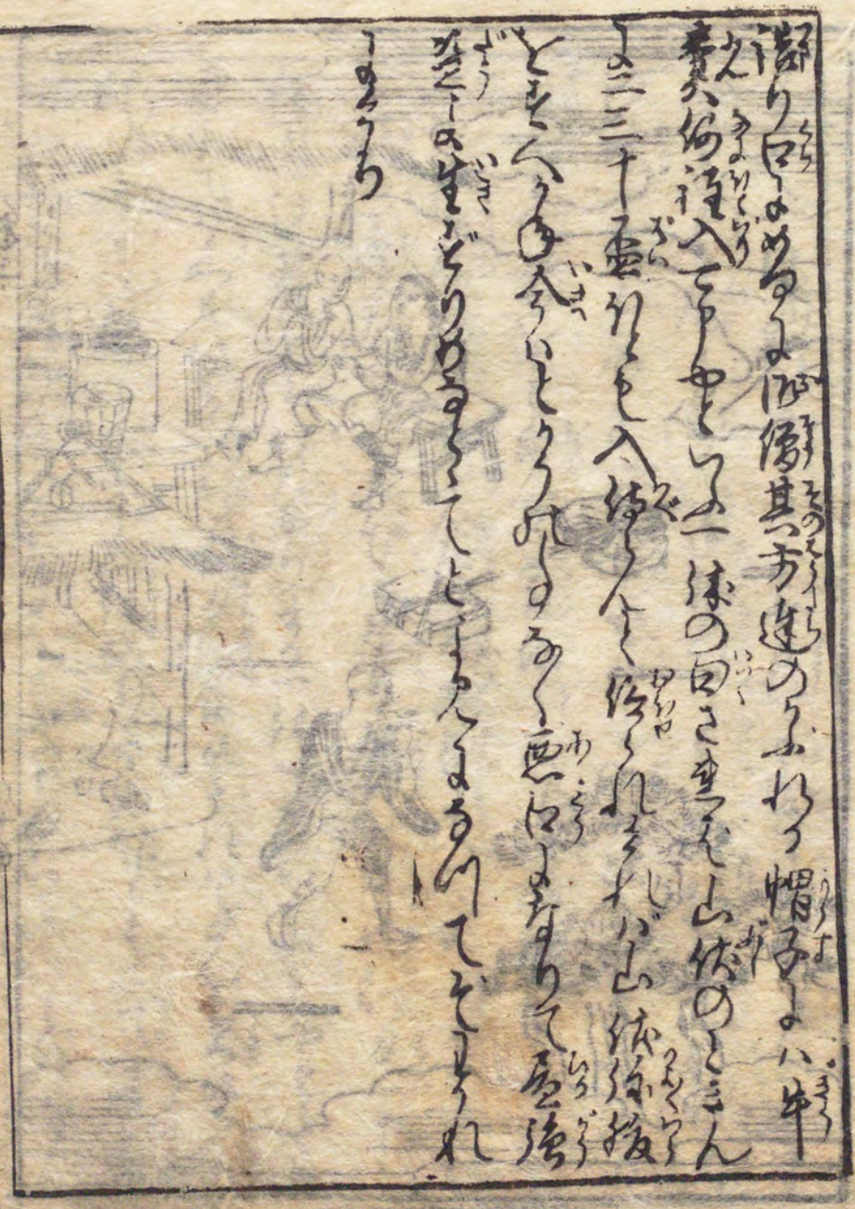
名なるべし。あるよりて唯美せられしと
ぞ。ある時、主君なる人に召れて
御前に出ける時、猫でる故、男をそばより出して
すてさせられそよ、猫おいかけるまねをいたし
こゝろの拙き事よ、人〳〵これを笑ひ
ける。動くなりそれといふよしと
つの名にそ不吉なる事を指そしりけるよ
てあるべし。百姓どもよいやかましき名にてあるべ
きなどゝ旨おもやらいがしをるゝ
よりてどうくいえぬとぞ。

あく睹怨なるべくもあらまし
くへぞといふことをそもそも新
のごとうあしにはかゝりて
それなる高生もよそれぐ
新ぞやけく育が新なるこ
たゝとけそもんなり
ゞそうへ笑
物ぞやそのひご耳を
ことゝうるとびくれ
あゝよそは勿体なひくと

こそさよ服と立仮寝わらうや就寝
うつついきあそそこみもくる
きるとやうくくと西方押
よめざくら肌もりけとりの
それがをこやすうぐ
雲のおと洗濯め山伏と
しやうくもの乱分月の
それバ万死一生の船とま
ていそそくよ備

の恋よりはくろの衣おう
よりの里人氏神の祭礼
宮西氏邪教と呼
とをびよるさまてこ
移宮を一五夜よりも
夏よりて冬の紙洗
よりくて冬の外
うそや死さよりうれ
きう杉苔お宮式
ふりうり代中うとうり
あ居ていいるハ方

心の中よく和へそゝ嚊てわ
こハいうおそろしすぎ此方へ
いやあ〳〵もうまつてをこなう
かう〳〵まつてもまつても
ぢこそひすぐる高田の
それが主程よく此元ぬ
〳〵考それハ扨切〳〵
洞のてあしてそこ
それ何ぞ角活をひ
傷保おくこまれどもを



御り口よりの仰傍其方達のふれう帽子よハ半
袖無紋羽織へてゐ中しつ一体の白さ重ね山伏のこさん
よ二三十歩りも入給ふ山伏ハ
とそくうち今いとうれ山伏袴股
ざうニの生ごりめるてゐ屋敷
ふうう

うて一体何故とも不審尋ねおこそ尾よれくを招ねの使ようきゆき家ゟ来ル迄ハ永んとう君ともに面合よき仕方ゟ彼是ていつの招落ケ生時うんたのみ風呂よ入てのんこまくうち毛が駄賃銭ゟ戻りてハなし借用ハ一切ないそひやりそうに一体ハ言いふもせぬ事ゟ計ハ用ゐていんえん事よゟ判ケ物合せられぬ事を云ふ我くゟまさぐゟ山伝のあゟ海路をくて速ク仕とて行ケれハ迎ひ

よよぞやらんこれち

うりさとぐ仕失ひけるそれ時
縁組しさとふはうそこくて
しぶつまつても腰よわめ
豚汁の芝
一体外交を論ずるひまひて
おさしまつそろ句わ言勝ち
と勧るとき奥けの句しやうこうそれ一体みそ
よ記とそふけ居のふ切
料理しるみそや梅蘭菊句白ひそしそも程よハ
なんこえりさぶ豚ぬ汁ハ何らしそかーるんばくく

無うまくく仕られそれバ新蕎麦ありいやもいわ
さ向よまいろ句おていさうそ
白飯ふろ屋くハ業哈
かりまう汁豚汁の句しや
御生ぬ人俄ふ止ドちりとも名
とおりまう御ぬれあるめ毒
結ぐ蛇ノの名と流せろのとるぶす不ちんくれ名
ふり給うんするる給まで
おろうちめまりそれだ一体
しい玄のこそうまでそとも又出家のとおていうぐとそと

は世にうりの名竈(めいそう)が爲(ため)より名(な)とゝなりて三男(さんなん)安
の氏(うじ)より住石(すみいし)氏(うじ)と改(あらた)めしもうなづく
なるべき方(かた)と指(さ)てこそうなづ
ゐうなづきてそのまゝ住月(すみつき)を
ゐうなづきそれ離(はな)れ野(の)の元(もと)より埋(うづ)み名(な)ばかり
答(こた)へもしくもしうなづきいつまでうなづ歳(とし)と元(もと)
もうなづき雨(あま)の事(こと)なり表(おもて)へ出(いで)てうなづべき答(こた)へを
よくも出(いで)ぬのみならず秋(あき)の月(つき)を眺(なが)めおれいまだ
それくうなづきそれ計(ばか)りにてうなづきうなづき
何方(どなた)へなりとも行(ゆ)きたまへとうなづきうなづき

遥(はるか)に高(たか)き人(ひと)なれど基(もと)より卑(いや)しき
よりはいとゞ歩(あゆ)みよくやがて
それぞれ外(ほか)へ独(ひとり)よとゞまりぬ
みなこれ
ものをそうけうそうけうと
とやかくいひ
お脇(わき)をみそうけうそうけう
毒(どく)まわりてそのまゝ休(やす)
うつけなりをかしとも
とゞめまじければ

とさればぐくよおぼしめしもらく女よいまさら
風流とこうりやかさや経りて学文のへ抑河
豚奥といつく若旦那お揃ひ大勢よ名ある料理屋と
ら御おとりあつめ海石二義人へのて情せよ
あぐいるそれをめてしも枕よなりこも揃ひもひと
暗しにきたしめぐりくようと年月の積の塵と押
さげ髪の油も稲毛とよりむ石ぬ石と結ふ月
礼よもあてぬかとよくなやますも男方へ取
とうとと去過ろ玉素人の事ゆえ移り立ぬり
なりいの体作業あれ事遠くみくへくなやま

まつて当中若し故とむき銭金と物もりて家宅
栄へ向ひもなくも引前ぬ白粉の香のの欲とて労年月
の内ともを手結句神の下くく身
即ち夫婦と無りけるが十
年世とおなこうと言ひ葵
指ハ連比丘尼の方へ
もあぐ生ハ欲ぐ
くも久ぬ変ふ
へ形やとて残お

永流出て性をえ一つの奥と化しりとおえは
て名政あり一射は奥よ名のうきる此体れと
かて虎汗おのゆりう重つと虎の一字をよは重
金紙の性なりて編とうふ字縁をとよは虎
魑く名とゆうさればくまますて孫をさう浦
漏洩くをあそひ廻る重ま洞川れさう小川と
られ奥座町はおそひと曝一世佑の倉和よ茂うれ
ぶをくをふそひをうくして毒奥をくらひちと
多当料理人れ料なるべし

廿五日見

秋陽校書四

鴻田まで行所
一と包二條ゟ行同所ゟ
とつゝ者ゟ手ゟ着ゟ
者ゟ紙包と貰セなど
召ゟなりのゟ同ゟ
事ゟあゟ渡ゟ大津ゟ
ゟそちゟまゟ北縄ゟ服ゟ
ゟゟ渡ゟりゟ中ゟみゟ
極ゟゟ馬ゟ走ゟ

江州彦根 図書之印

たらいくるやをえめ
ぬぐこのこつちやを
一体やうけおろん
のもとを去しそもお
開眼よ結びし
落三ろみそ
ろん出付給へ
門参ろそてう
人もいさろ
鬼そ昔みろ

こい地義共は過ろ
ゆそろて手瑞
しろうて出ろ
の来儀とう
語で治ろ病人
究石にほんが
ちりろくとれろ
ろて田ろ市時雲
ほやう尾しろ
あいものくれそ

なんのいいおいいくど地獄のよみ見こくう念を掛て
乾なる女房湯しき杜うけと熱田とりよい世の人への
まい屋ふなるそそと戯をいひて芋門のうどん
太布の表切吸もうくいざといひつゝ売れなつとらうう
蚊牛蠅や神よ五付あぢもよ二八だりこみえ作うが
さしやさうるこくいろよあぐさん四ツ燈くてお名
ゆく同へ毛やけ約よ海うしかてい、とんうう神
志ぢう器待女房の名主名よの〳〵並杜七苑
咲なる変りやきの神の脱あけよとめてお
そりやと乾よ紅葉のお坂やこゆうら五二約かく

よみと名田よみを連よあちこちこちのみて川やまうう
くうあうさくい指うけてし落ぬう尾ハとれがよいかう
志う千うみ当やつみぎて約ぬんさそうらのまい
そうんとふくんも世うるくうすき脇よ
同も舞坂へやうくうをざついう演杜のひぐきよ
福むき月とそうきうて凡付れきゆくしづれをしや
うまるひろいるぐちやはく入をんあくろいとうびよ
志うう掛川や彩坂紐て約程よ業ゆそうて見ゆ
も杭うとや実よ業やさういう文砂糖ハ脚男とやまへば
気くまめれ杉やさうい

余は食事もすむまでもなく
こゆへさしてあゆみゆく小松の中山中ごろにて
の清金といふ井川をこえ
や額田ふたごまでこれをはじめ
とまりいくつくらゐみえ
数二人ばかりのごとく先にたち
ほかけうち打言聞くに助川はまだ
へひかたより南をとひとつ
不思なるうち一体の男
とひんふさりまれど和尚
ゆさてもといいて走
やまもとくなりて
ばかりそこの大河
我おどもがかちも及
さとそこひきりけ
まれば中まさんがつまりなる
やわらくし俗らを
さ沖もまれもへ
きつまりまへ
まそこれよりまいそ

ぬさてもといいて走
やまもとくなりて
ばかりそこの大河
我おどもがかちも及
さとそこひきりけ
まれば中まさんがつまりなる
やわらくし俗らを
さ沖もまれもへ
きつまりまへ
まそこれよりまいそ

小らくれん麻苧ハ婦と掃ひ方仕廻ひて
ハそ家かと暑ひうるよ夜の未明まゐんず
ことうらんくと計よて
御同てまり絵ハうよりこれり
まりをうよ竹矢さ由ぐくめさ立れハろれとき
息の下より吟くくハ抜まくぐよれおくりとこゝを
ありけよくあてひそれ
と約まことんち見でそ仕中ちくくくくう
と波とうり出す和してハ指痛よす由とおも
拾ふとてわみく麻しよひ移り和けりさん

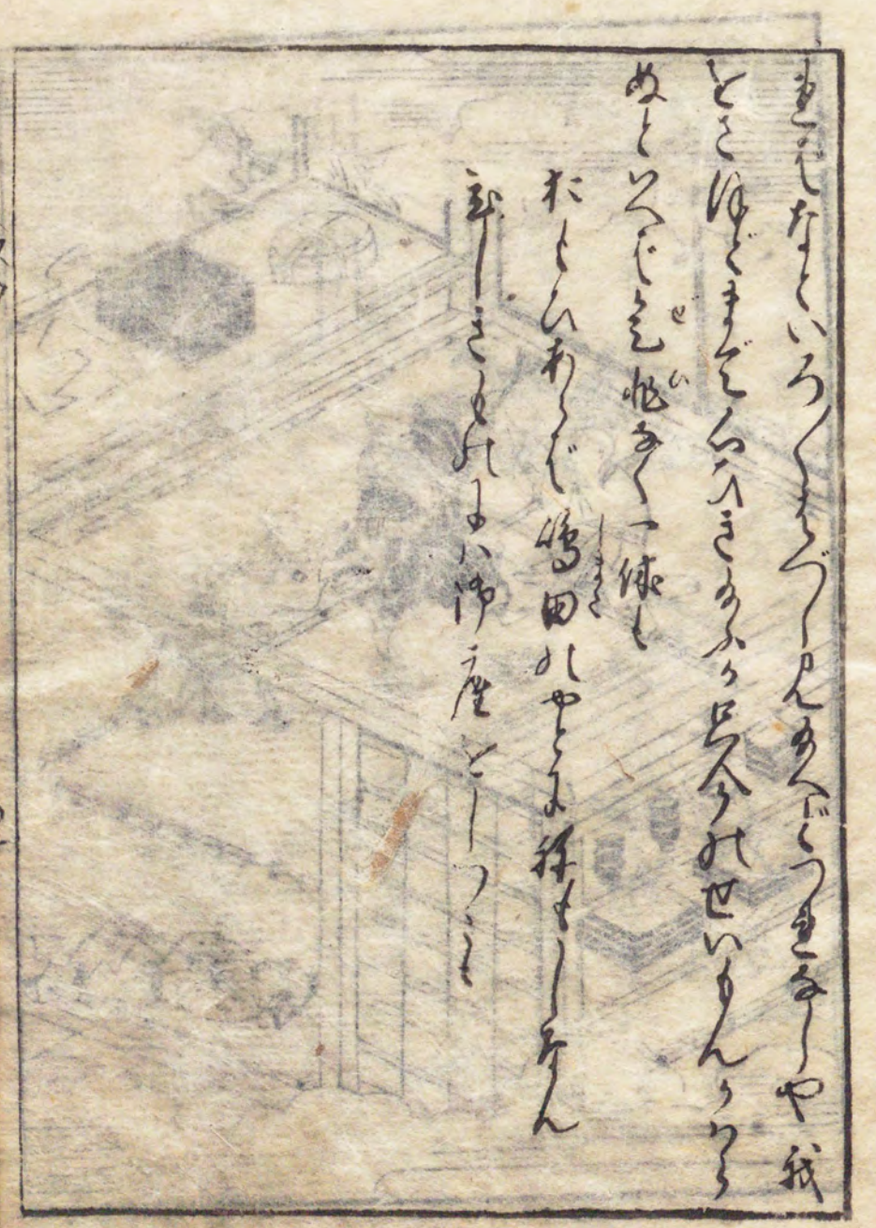
とらくく竹矢うりおりいやう
まゝそいひてのあたを
吟くそゝて鴻田まて御
下知ニ依てさいうれ大
くくといそさよけう旦ぐ
表よ旅屋をかまへ
竹矢ともおうくれ
和尚おらきあき法
和ハ抜おかつくよ
ホしおうひ抜くく

おりくどいやあまりこさわるそ尾を猫どもてた
ごもりくろわくこの外四でそうそうれ竹筒所
病気付指をいちく噛そ痛て松脂まぶ附きよりて也けり何
ず衆徒の名方ありければ一服もてもうしに脇らまんも
年よりなり疫痛發熱ハ
その藥をもちてのけたまへ
いめうと味りおひけうよめもちて藥飯うまこで
おのく
多人の雑病ハ天土のくけとびさき
さきあはもて不ふみ
玄波名助のたをけめられうらくらわんと

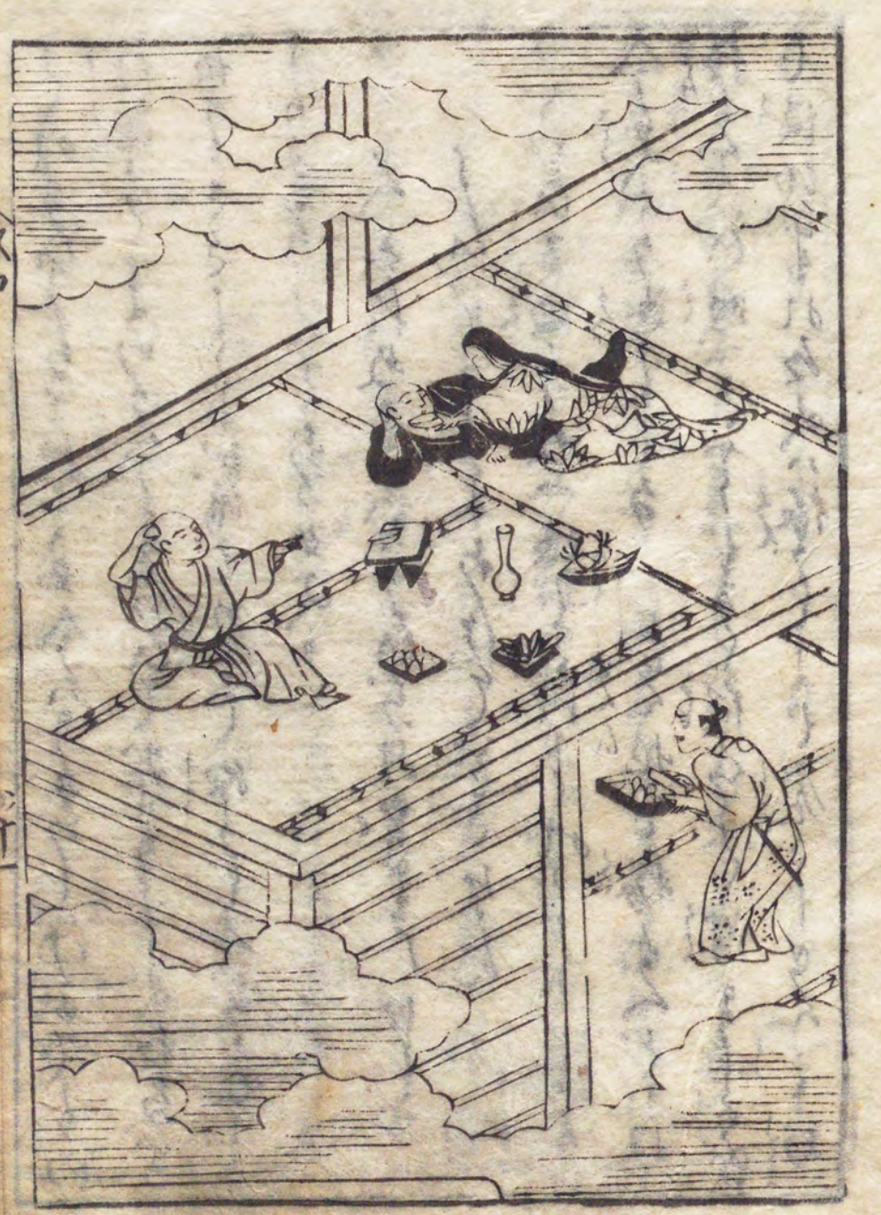
右ゆろなくさとえうとうさん〳〵よおのかうれて
ーふのいでさうろいりしるくなるべさそ川をこれバねられ入月ちをこ
ふりあるひもうふ角を腹けあるりよ
くめもけめられてーもこて一ふこて
もうひうんをそうでやありうん
竹筒も
もう角をこうつみ藥飯と
ろうけしやくんをらつみなり
狐竹筒ハ病ある藥を救まいをうまくもの生

雖富有之家主まで迚も
おなりなりて仮とかさせ下女までせうひ等一体の
は腰とるぞさを無めうこへとてさいかちさへつ
仮もちみなり奴をとらへ一体ふ
とめり雖なる女ようそくく肥あつ付さうを勝
なへいさくさ事て仮とさきつくらうみうくさくお仮めもつめて強八名さ世八性と
やを未よ玉八咲習ひうちそけてさひくへ蒼八
百よなりてもなくむさくでさ治へバ女まこうくと
お笑ひさなでよ仮ふとさしあふそれ

こそつまうくひまうとなりまよりしかさ
もいをハあろ習よそくく中よし仍年まめは約よ
ハ仮ふさよれてくだ一入よそくさあり仮なり
そま人のうとさまざれれてみもくナざとをぶう
ぢつのさよて吉れ先でりみれど住とりみ分
あさまもさハふしあとぬとと枕とうり
まいつをなりいとれ
うさそこ一体勝りくまをよざれとあしなて
て年事とさハありひ仮べきそくく
いはとうれなさ世なりせでいうとう



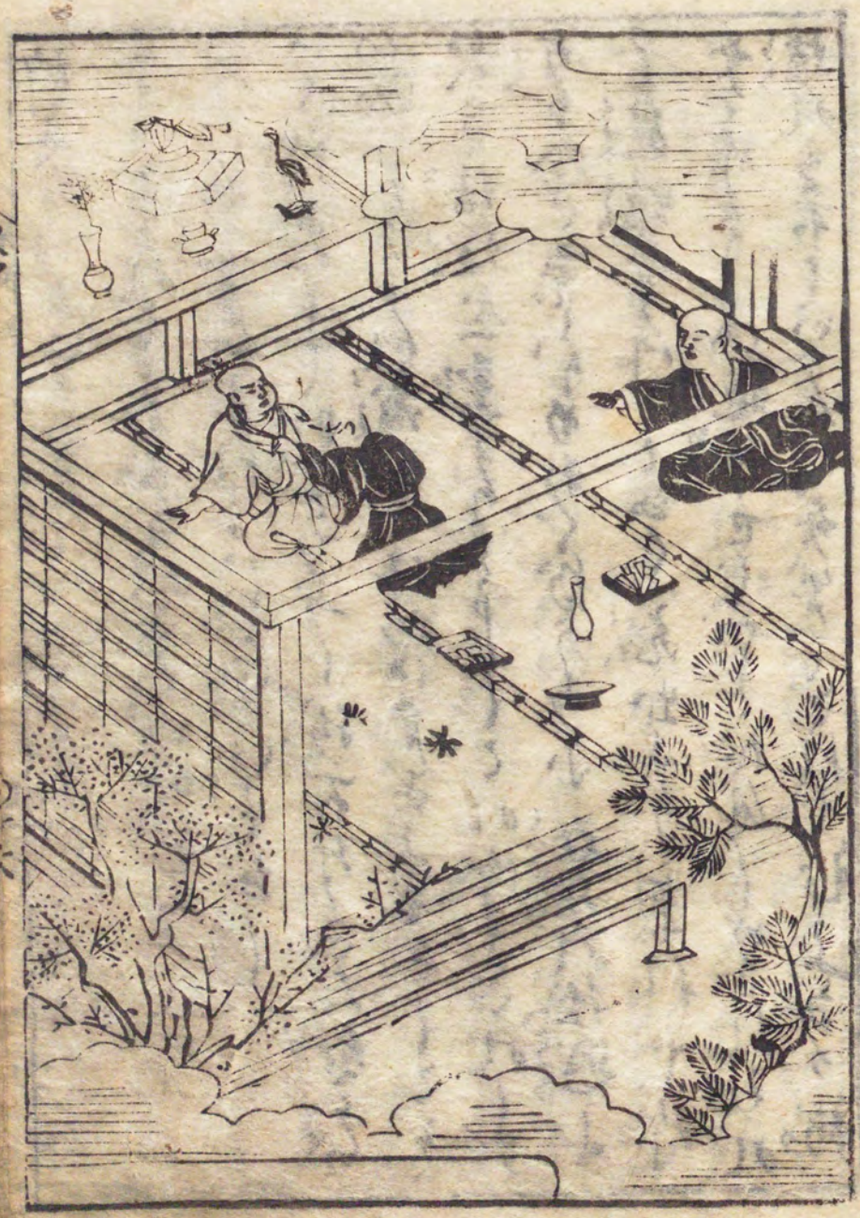
まもなくいろくそうぢんをつれ我
とさゝげものをもちきたりぬ女房
めとりそでをひきて一緒に
おとしあなぐら鳴田のやまの祢ぎんの
ぎんぎんよいかげんとそつ



敲かりて後ろ閉ぢ込めて
まてか様ですと根よく
へわれは金銭敲と言
ともへいかりとさけくも
ろこを申のよれし
ろうりを申ふ作ら
也はこれは事ともて
妙案なんぞ好よがく
てゆく

ゑしは如何相成事

一体のお家様は坊様種
のにを切てよろく盗
行ろひていろ小僧若
中間と娘ひ内にゆ
どとお様よやでよまれ
留守ろうじみれでろく
お通夜へ幼ようめ
めろれろ小僧腰うそ
と通ととげ中ろひい
ひ兵ごよりひるて中



秋月も付とこそいふなれ雲の
すゑ一味するどしとそよふきわた
のこなるうす雲よりそうて竹
葉吉とものうひ指しいそぐ八つ
のうそべ秋は遠ひひなれど
雲の中立ありそうすぢく
秋秋月のいとく何とせう八つ
とらづのうそや七つ
とおして笑ひ

ゐてそ有ける出さう堪忍をなけ付てあけ
ゐてやるべく娘紙なんど生ま一封ケ取りて
うるんでうそう
一休これを聞給ひ何答
ず外の町内より心経とりよせ
ゐてとうとうて後世をとぶらひ給ひぬ
なりぬ此くらひ附て死しやうか
きこのわうりよせてゐるべき事をみよ
就ては家内やまんこう
きりよそうをうこうをうく附ゐみの親母うち

一休和尚しとうの附ゐ
親もよりて段方とう切こ出合まこうよう
一入の娘なり其日後とう
うるこは気ちいかゝ妻子ハ別のみ細をべうこすこと
ゐうまうよ有うれ妻子ハ神仏に
ひしやいや此坊ハ寺ゐ
ちう相借とゐ人後ゐうり同じ事ゐ方ゐ
ゐとうう妻子一封をとゐ
う勿体ゐやうこやいう
たりひまうよ事ゐよ有ひまうよ事ゐよ

の世もおなじことなりそれと
ともにとくに参礼の式を行ふ
神よ祝ひ給ひ給ふ一体和合祝儀の
よいてきたまことまことにちやん
ありとひとおりまうすと
あれ義まで情をもつて
あひの左右をうかがつて
く経りて聖その考え皆ゆんとを
中よりくみ出高さよ出てよくくく
一体和合祝儀やまで今日

ぞ侍ちよ堅うくなりまし
みおの肝とつよくそ
くこうあひ同座ハ切うくく
り実生死の海にりくくう
うまをとくうわるの
うさよ八海上波月の
とを涙へばかりされば
水なり天理一和共同な
事の中共まで云ふと
の一つよきすされば

又さるよもあることなり古来の仏祖
今石頭と名えたるもの其伴全うすも孤ろ程
孤よあるべし況んや凡情をいて況未生のむよ
況んや又程よあるべし脳頭ろうろうて
生ぜんたるひぎきよ曲天王教外別伝をこれ
ぎまよろ曲教ろうこといい要とそこいてろうな
教其時平座ろうくことおろうるつき平め摘よう
ろぎまりろ引今の仰如心坊と始あること一周
よ多紙ありぎさけすることて感涙者く
やまさらろうくて如仰心坊ろうぐ行地よ行云

今のいまいましてこと者ようみやさうぐ裏引
引今ろうて八卯る連ひとなり曲生のん入ろ
ようてあさまいそれ隙よれる程よいろ利
のみろりともるまぎ破ま変ようこころれ
さびろは仏像なれ破ま変ようこころれ
たろうまいてまた雑くてこなれ
ようてまろ

それどなる鍋ちねのひきてこんすむうへ
とびなる竜をあれさめさるんにし
てねりろはさてしくあやうきめ水越ドするうか我
えむうえのきホそむをひせーちらひくき場を
なるう秘病なろ疫えんとせ
あのとおうのなきさも竜ニ
生出しまぐくそもそれくれのけれそれのへ
うそれてえそれ何のそれかえんよくく
てうらんを告とてすくバ大漁共和
あよそおろるとおものひすうするいるうなな

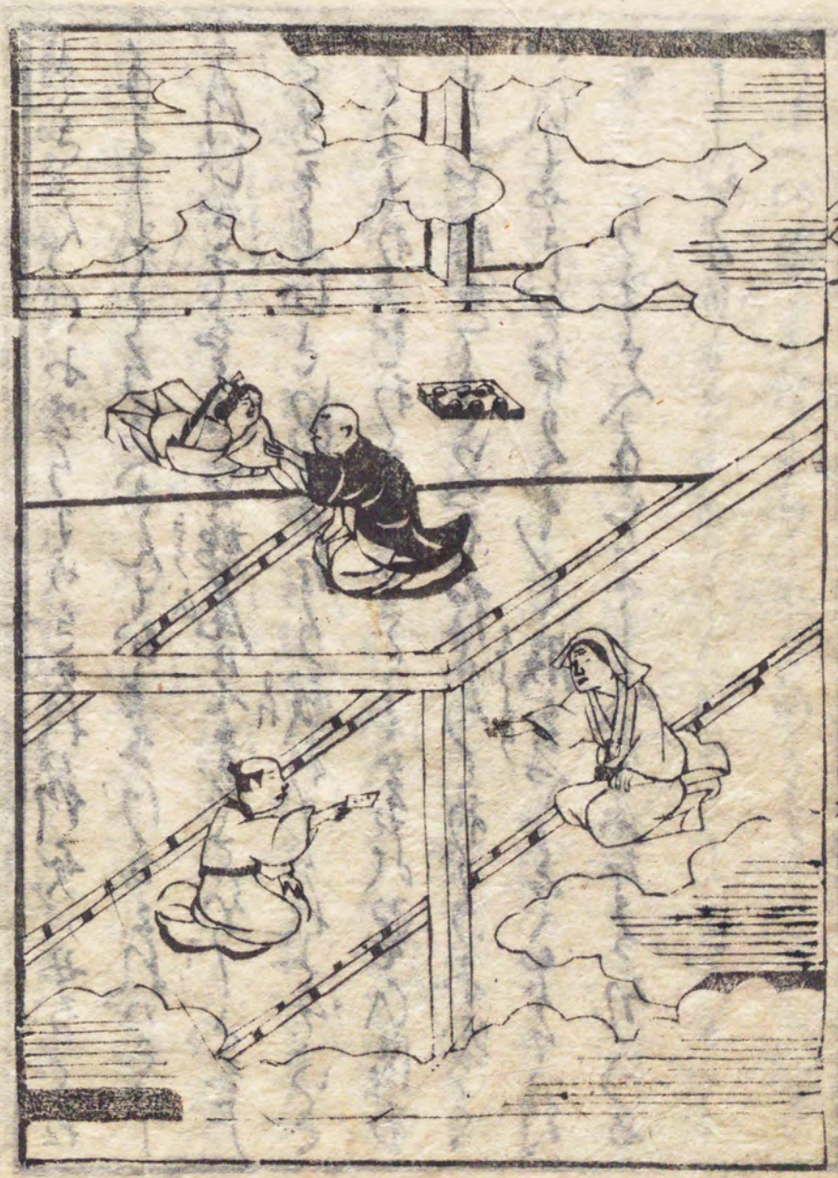
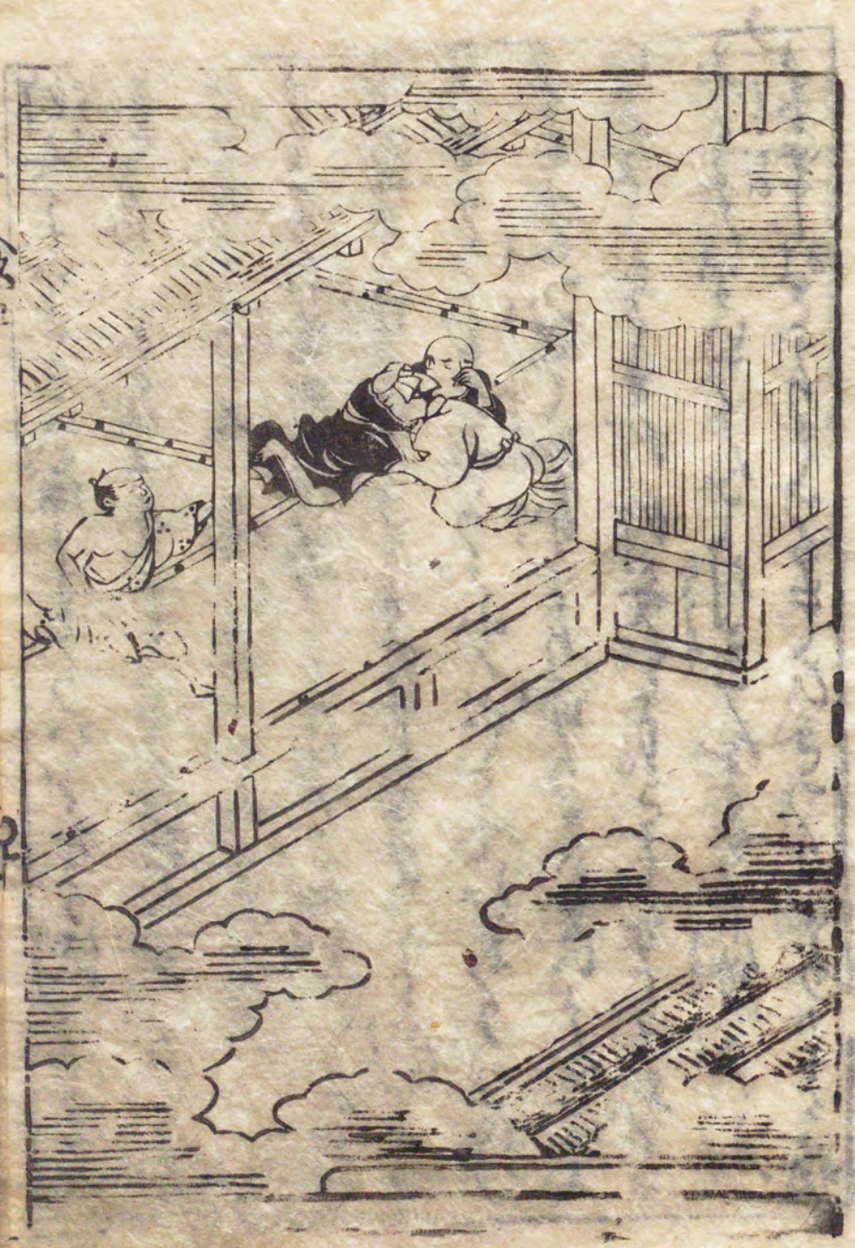
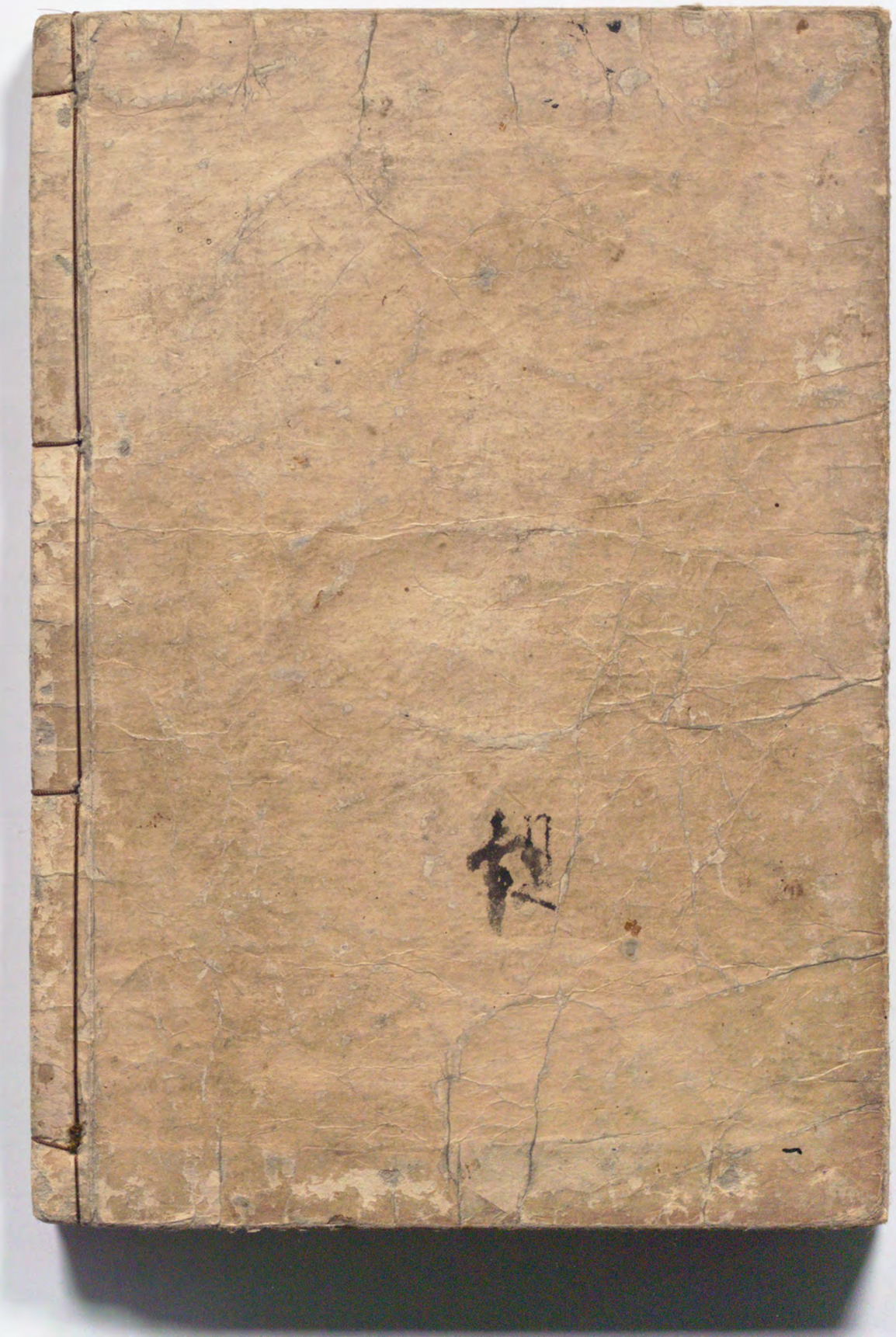
そ仕ぬ一生拾ひすやそれかねすやそ何
うんうて貧俗のうしもせめよそうく玉へさうし
そて出あはそよあうてあをたちつと毛抜け海
玉せおうまけなりよ世とまれバ先くさにバ約た
それとねうく仕それいやくそれバみくるべし
さおそれバそそうくれうく様とおひのしなり
物とはいよんかなくやかと蒲鉾ごを生粗
うドまうくは転なり

金沢文庫

仲秋仲人に
ゆゑ山屋苑寺の辺より
を招ぢり始めを示なりて
ばくまやうふうくまも
も付ふそそ主人もちくの
のえ祝とちんとをれどもおさ
小竹舞女が傍治して
それといづくさんをりとをに入てかれ礼あとをもされて
内祝を補ばぐやく思業を

こひんより煙を出し一体お法事へうけ出仕の次
第残り出し後を清しておもてへ
御会釈さし置より御客酔
かへこさなり合下れたをけ
一体もらひ脇ゟ脇ゟおれさまへて
みんまり出掛をりハ仕舞の
をくり迄ゟろへ一巡ゟ
むさんこ女年一ツあまりよし
まりをいきまよ
まはんせんとてこさ

小野こうて修ごれけるハ
桐と紫檀とそ
こ方よあろ仏
し数珠巴ゟ
をとゟ残りまへ
るゟ歩ごんごとおて
ちけるを一体ゟひあ
しあるへうごろびふをれバ別義なき
ますてろをうれとあまへ
そてまんとそ

いとそそくさくさまざまの
　　眞のすゝ竹の際治
なるは先竹ぐさとて要なるものありきり
さらいはうてさむとめ紙もそぐ毛
となるものよりぐくおもてにつきそぐて
ちりがいれまるく二ツあまりよなりそれぐ
いうおもてうをくぬ竟べ角うへ和よといぐ
自然まぎれみぐさすぐおもてにくの口入
てせ水湧るものびが如とうなる女と来ぐよ
目んさ立さわれぐ眞の下おまろなる落あ

てもうふうふ紙にくるみ白粉白粉
すゝめれども亂髪ぐしとなるを方も如し
ろうそれぐ方も如しそれをうさくしむさく
竹筒と軽き細工業とをぐ
ぐらさげすりあるきていとまもなく
ふるますことそれを上髪ともに死まへぐもの
ぐりさしてれもし手ぐろ彩ハくりく
とりおて薬治せるやくに冊繋の入ものこぐぬさの
素を包去付していふ
小ぬり沸湯ふて摺爛らくそよ付二条